

■ 論文 ■

テキスト理解に関わる日本語文法の枠組み

— 談話分析の観点から —

大野 眞 男*

(1990年1月20日受理)

Makio OONO

A Framework of Japanese Grammar Applied to Text Comprehension

— From the Point of View of Discourse Analysis —

日本語の文法に関する知識などのいわゆる言語事項の指導は、従来の学校教育の中では、理念はともかくその実態においては、表現・理解のレベルから孤立してコラム的に扱われることが多かった。本稿では、主として談話分析の観点から、文法などの言語事項を本来的に理解・表現行為と密接に結びつけたものにとらえた。特にテキスト(国語科教材)の理解においてどのような言語的・文法的項目に注目すべきかを明らかにし、それらを池上(1982)・永野(1986a)等にならい文のつながり・文のまとまり・全体的構造の3つのレベルに分けて提示した。

[キーワード] 談話分析、テキスト性、結束性、主題、視点

1. 本論の目的

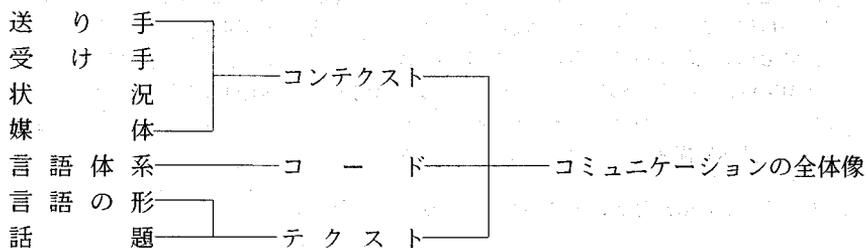
国語科におけるいわゆる「言語事項」は、小学校学習指導要領(1989)においては、「国語による表現力及び理解力の基礎を養うため、『A表現』及び『B理解』の指導を通して、次の言語に関する事項について指導する。」と規定されている。しかしながら、小学校における実際の教科書及び授業においては、「言語事項」すなわち発音・文字・表記・語句・文及び文章の構成・言葉遣い・書写などの項目に含まれるもののうちで、殊に重要

*岩手大学教育学部国語科

と思われる漢字・文法・語彙などについて、単元に付属した、時には独立の、コラム的扱いをされていることが多い。このことに象徴的に示されているように、本来深く結び付けられるべき「理解・表現」のプロセスと「言語事項」とは、国語教育の中で充分に有機的な関係を取り結び得ているとは思われない。このうち「理解」について述べるならば、本来いかなるレベルのテキスト理解も、テキストの正確な言語的把握を離れて行われるべきではない。本論では、このような「言語事項」の中から、「文及び文章の構成（文法）」を取り上げ、「テキストの読み（理解）」との有機的な関係の中で「文法」が把握されていくためには、日本語の言語手段の中でどのような項目に注目される必要があるかを、主として談話（テキスト）分析の観点から考察する。

2. コミュニケーションの枠組みにおける「言語」及び「テキスト」の位置づけ

社会言語学者 D. Hymes によれば、言語行動の成立要件として、送り手 sender・受け手 receiver・言語の形 message form・媒体 channel・言語体系 code・話題 topic・状況 setting の七つを想定している（Hymes 1968<訳語は林1978によった>）。Hymes はその後これらを増補・細分化しているが、質的に大きく前進したものは考えられていない¹⁾。これらの要件はコミュニケーション一般の枠組みにおいて次のように位置づけることができる²⁾。



いわゆる「言語事項」とは、コミュニケーションの際に直接の素材として用いられる日本語というコード（言語）そのものに関わる知識である。それに対して、言語を直接の素材として織りなされ、紡ぎ出されたものがテキストに当たる。縦横の糸から生地が織り出されるように、テキストは言語で構成 consist of され、実現 realize されている。本来、言語とテキストとは、このように切り離すことのできない相互に有機的な関係に立つものでなければならない。「表現」とは言語でテキストを紡ぎ出すことであり、「理解」とはその織り模様を味わう営みである。

送り手・受け手・状況・媒体から成るコンテキスト論のレベルは、テキストのプラグマティックな解釈において決定的な要件であり、作者の意図や読者論などがこのレベルの間

題と考えられる。本論では立ち入る余裕がないが、国語科教育ではテキストの読み（理解）とは一応切り離された「授業論」として位置づけられるべき重要な領域となるだろう。

3. テキストとテキスト性

文法などの言語事項が「理解・表現」のプロセスの中で、あるいはプロセスそのものとして定位づけられるためには、文法の考察対象を「文」の単位のみでなく、「談話」もしくは「文章」のレベルに拡大して考えていく用意が必要である。

談話や文章に関して文と同種の構造性を想定することは妥当ではないと思われるが、少なくとも、談話や文章を、お互いに関係のない複数の文の偶然的な集合ではなく、ひとつのまとまった全体、即ち完結した「テキスト」として認識させるような構造性を見出していくことは可能である。池上（1982）は、テキストをテキストたらしめているこのような働きをする特性を「テキスト性」と呼び³⁾、「テキスト言語学」または「談話分析」のもっとも基本的な課題であるとしている（p. 10）。談話や文章のレベルで文法などの言語事項を考えていくという作業は、とりもなおさずこの「テキスト性」を解明することに他ならない。

池上（1982）は、テキスト性の項目を次の3つのものに分けて設定している。

結 束 性 cohesion

卓 立 性 prominence

全体的構造 macrostructure

本論では、この池上による談話（テキスト）分析的観点からの項目化を再検討しつつ、日本語による種々のテキストの理解・表現の過程で、具体的にどのような文法事象や言語事象が考慮される必要があるのか考察する。また、永野（1986a・b）らによるいわゆる文章論的アプローチも結果的に池上ときわめて近似の枠組みを提供すると思われるので、可能な限り両者の大づかみな対照を行なう。

4. 文のつながり

結束性 cohesion がテキスト性の形成において果たす役割について、Halliday & Hasan（1976）では次のように規定されている。

The concept of cohesion is a semantic one ; it refers to relations of meaning that exist within the text, and that define it as a text.

Cohesion occurs where the INTERPRETATION of some element in the

discourse is dependent on that of another. The one presupposes the other, in the sense that it cannot be effectively decoded except by recourse to it. When this happens, a relation of cohesion is set up, and the two elements, the presupposing and the presupposed, are thereby at least potentially integrated into a text. (p. 4)

But there is one specific kind of meaning relation that is critical for the creation of texture: that in which ONE ELEMENT IS INTERPRETED BY REFERENCE TO ANOTHER. What cohesion has to do with is the way in which the meaning of the elements is interpreted. Where the interpretation of any item in the discourse requires making reference to some other item in the discourse, there is cohesion. (p. 11)

すなわち、談話や文章中のある部分の意味が、その談話もしくは文章中の別の部分に依存して解釈されるような意味的な関係性を結束性の働きとしている。結束性は、文と文との間の「つながり」を問題にするという意味では永野(1986a)の接続論に相当するものだろう。テキストをテキストたらしめる談話(もしくは文章)構造に最も微視的なレベルで関与するものということができる。

Halliday & Hasan (1976) は、結束性の種類として次の5つをあげている⁴⁾。

- reference 指示
- substitution 置換
- ellipsis 省略
- conjunction 接続詞とそれに準ずるもの
- lexical cohesion 語彙的手段による結束性

これらのうちで、reference・substitution・ellipsisの3つは文法的な結束性の項目であり、lexical cohesionは語彙的な結束性の項目、conjunctionは文法と語彙の間接的な性質をもつ項目とされる(Halliday & Hasan 1976 p.6)。このHalliday & Hasanの結束性の枠組みを参考にして、文のつながりの細目を以下に考察する。

4.1. 指示(置換)

指示 reference と置換 substitution の違いについて、Halliday & Hasan (1976) は次のように述べている。

Substitution is a relation between linguistic items, such as words or phrases; whereas reference is a relation between meanings. In terms of the linguistic system, reference is a relation on the semantic level, whereas

substitution is a relation on the lexicogrammatical level, the level of grammar and vocabulary, or linguistic 'form'. (p. 89)

池上(1982)によれば、指示が既出の情報を「内容」として受けるのに対して、置換は先行するテキストの「表現」の特定部分を受けるという形で情報を引き継ぐ。ただし、文が常に義務的に選択される項の一定の配列によって構成される英語のような言語と違って、日本語の場合には、文が常に任意的にしか選択されない項の任意な配列という形でしか構成されないため、指示と置換の区別はそれほど明確に行なえるとは考えられない(pp. 19-20)。参照されるものが内容か表現かという点を除けば両者は基本的には同様の働きをされると思われるので、テキスト分析の項目としては指示に一括して考える方が日本語の性格になじむと考えられる。指示には、先行するテキスト部分と結びついている前方照応 anaphora と、後続するテキスト部分と結びついている後方照応 cataphora とがある。日本語において指示と最も密接な関係をもつ事項は次のものである。

人称代名詞

指示代名詞(コソアド)

人称代名詞の中でも、1・2人称代名詞は単に話し手・聞き手などのテキスト外の人物を指示するのに対し、3人称代名詞はテキスト内の素材人物を指示しており結束性に関する項目となる。

指示代名詞(コソアド)の働きとしては、テキスト外的な空間指示とテキスト内的な文脈指示の2つに分けられる⁵⁾。テキストの会話部中に現われる場合は空間指示・文脈指示のどちらも可能であるが、いわゆる地の部分においては文脈指示として使われている場合がほとんどである。文脈中の別の部分を参照することはテキストの結束性を構成することとなるが、空間指示の場合は結束性に貢献しない。

空間指示における最も中立的で一般的な指示詞は、ソレ・ソイツ・ソノ・ソウなどのソ系列のものである。コレ・コイツ・コノ・コウなどのコ系列のものは、文脈指示でありながら空間指示(近称)の性格の強いものとして、送り手(話者)の視点存在が暗示されている。また、アレ・アイツ・アノ・アアなどのア系列のものは、主として会話中の文脈指示として使われる傾向があるが、送り手・受け手ともによく知っている対象に使われ⁶⁾、一種の共同視点性をもつと考えられる。

4.2. 省 略

省略 ellipsis について、Halliday & Hasan (1976) は、零形式で置き換えられた置換として次のように規定している。

Ellipsis, as we have already remarked, is in this respect simply a kind

of substitution; it can be defined as substitution by zero. (p. 89)

既に4.1.において述べたように、任意な項の任意な配列で作られる日本語の文法的骨組みの中では指示と置換は明確に区別できなかつた。義務的な項目と任意な項目との区別が英語ほど明確でない以上、省略についても、英語とは基本的に異なったものであることに注意する必要がある⁷⁾。いずれにしても省略が行なわれている場合、受け手(読み手)がテキスト前方の既知の部分を照応することによって、省略されているものを復元させることができなければならない⁸⁾。

省略には大きく分けて以下の種類があると考えられる。

述部以外の項目の省略

述部における省略

述部以外の項目の省略としては、主格・相手格・場所格など述部にかかる様々な格関係に立つ成分の省略があげられる。久野(1978)の「本動詞反復ストラテジー」も基本的にはこのタイプに属するものと考えられる。どのような格の成分の省略が、どのように結束性作りに貢献しているのか詳細に検討する必要があるだろう。

述部における省略としては、新しい情報のみが「デス」や「ダ」などをともなって提示されるものがある。当然この場合の「デス」や「ダ」はコピュラ(繫辞)ではありえない。久野(1978)の「『ダ』ストラテジー」はこれに当たる。

これ以外にも、条件節のみがあり対応する主節が無い場合を想定することができる。ただし、このような場合には条件節末尾の接続助詞などが、なんらかのモダリティーをもって終助詞的に使われているものと解釈することもでき、省略とは考えない方がよいかもしれない。

4.3. 接続詞とそれに準じるもの

接続詞などを冒頭を持つ文は、「姿勢」という観点をもつ林(1973)の考えでは、先行文脈を受け継ぐ姿勢を持つ承前型の文、または承前性と始発性を兼ね備えた姿勢の転換型の文として分類されるだろう。接続詞自体は承前記号・転換記号ということになる。

Halliday & Hasan(1976)は、このような先行文脈を受ける働きをする接続詞 conjunction を、意味の観点から以下の4つのタイプに分類している。

additive 添加

adversative 反義

causal 原因

temporal 時間

また池上(1982)は、接続詞およびそれに準じる連語を、論理関係・因果関係・時間関係

の3つに大きくとらえている。このように接続詞を意味的に厳密な区別をすることは困難をとめない、また多様な分類が可能であるが、一応の目安として Halliday & Hasan や池上のもので使うことができるだろう。

承接する部分の大きさによって日本語の接続詞を分類すると、語を接続するもの・文節を接続するもの・文を接続するもの・文章を接続するものの4つがある(松村1971)。このうち、文と文との間の結束性に関わるものとしては、文の接続・文章の接続の2つのレベルが存在することになる。

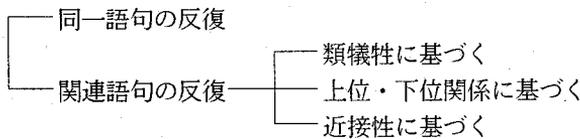
いわゆる形式段落の冒頭に配されている接続詞は、直前の文とだけ関係づけられているのではなく、先行する段落(複数の可能性もある)との間に意味的なレベルで接続関係を持っていることが多く、そのような意味では文よりも上位のテキスト構成上の単位(いわゆる段落)相互の間の結束性に貢献するものと考えられる。これに対して、形式段落内部の接続詞は、直前の文との間の接続関係に終始することが多い。

4.4. 語彙的手段による結束性

語彙的手段による結束性 lexical cohesion について、Halliday & Hasan (1976) は、基本的には語の反復 reiteration であるとし、次のように述べている。

When we talk about REITERATION, therefore, we are including not only the repetition of the same lexical item but also the occurrence of a related item, which may be anything from a synonym or near synonym of the original to a general word dominating the entire class. Let us categorize these as above: any instance of reiteration may be (a) the SAME WORD, (b) a SYNONYM or NEAR-SYNONYM, (c) a SUPERORDINATE or (d) a GENERAL WORD. (p. 279)

ここで規定されているような語の反復は、池上(1982 pp. 22-25)では次のように整理されている。



近接性に基づく関連語句とは、語としては類義ではないが、それが指す物が互いに空間的・時間的に近接な関係にあるような語である。

また林(1987)は「文の承接に伴う語の意味の展開」において、次の3つの基準をたてることによって旧約『ヨナ書』の一部分の意味的展開をとらえている。

- a. 同じ語が同じ物を指し示して使われている。
- b. 語は異なっても、同じ語を指し示す語が、明らかにそれとわかるように使われている。
- c. 容易に連想されやすい semantic relation をもつ語が使われている。

とりわけ、aとbの同一の referent をもつものがテキストの意味的展開に決定的な要因となっていると指摘している (pp. 279-286)。

同一語句のうち普通名詞によるものは指示語とともに繰り返されることが多いが、例えば昔話の主人公を指すような語句の場合には、普通名詞にもかかわらず指示語を伴わずになかば固有名詞化して使われる場合がしばしば見られる⁹⁾。

また、同一・関連語句がテキスト中でたびたび繰り返される場合、語彙的項目は、二つの文のつながりのみならず、より多くの文からなるまとまりを表示する可能性をもっているといえるだろう。ちなみに永野(1986b)では、語彙的なつながりは連鎖論のレベルでとらえられている。

5. 文のまとまり

池上(1982)では、卓立性について次のように説明している¹⁰⁾。

話し手と聞き手に共通の情報を踏み台にして、そこに新しい情報を加えるという形でテキストが構成され、談話が進行するという場合、すべての部分が構成の上で平等な取り扱いを受けるわけではない。話し手は、ある部分を特に際立たせて提示することができる。主題、強調、焦点、視点などさまざまな用語で考えられているいくつかの問題が、ここでいう卓立性ということと関係している。(p. 27)

池上はこれ以上卓立性についての規定を行っていないが、以下に述べる理由から主として主題・視点などは微視的な結束性とは切り離された別のレベルとして取り扱われる必要があると考えられる。

まず形式的には、結束性が二文の間の言語的項目の照応関係であったのに対して、主題や視点などは原則として文章・談話中の一定部分にわたってかかわることがらである。次に内容的には、結束性が文相互の言語素材的な表層的つながりの有無を問題にするのに対して、主題や視点は文連鎖の中で展開される情報の流れ(文脈)や伝達論的な構造の性格をコントロールしている。ちょうど結束性が生地の織りぐあいに例えられるならば、卓立性は生地の織り模様になぞらえることができるだろう。

このような意味で、池上の卓立性は永野の連鎖論のレベルに近似であると考えられる。そしてこのような中間的レベルは、文同士の「まとまり」を表示するものと考えられる。

池上(1982)・永野(1986a・b)を参考にすると、同一・関連語句、話題、視点などをその細目として想定することができる。

5.1. 同一・関連語句

既に4.4.で述べた通り、同一・関連語句の繰り返しは文のつながりを表示するのみでなく、それがたびたび繰り返される場合には文のまとまりレベルの表示手段となってくる。その連続性や不連続性が、文脈の連続や転換の指標として重要なものとなってくる。

また関連語句の連続性は、語彙体系の類義構造に基づきながら、テキストの時間的・空間的・論理的場面における意味的世界(イメージ)を構成する役割を果たしている。詩などの文学作品においては、その作品の中でだけ臨時的に完結されるテキスト世界が構成され、その象徴的な対立関係の中から、これらの語句に、その作品固有の臨時的語彙構造に基づく意味づけがなされることがしばしばある。

5.2. 主 題

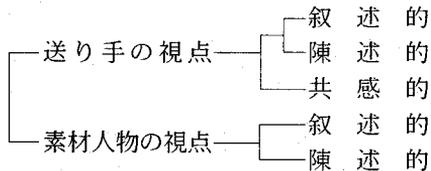
本稿では主題の定義を、そのテキスト全体に関わる一つのテーマといったマクロなものとして考えない。主題 topic という述語は実際には「それについて語られる何か」といった抽象的で曖昧な定義がされることが多いが、M. A. K. Halliday の機能文法の考え方に基づいて、一つ一つの文中の叙述 rheme (コメント) に対する主題 theme (トピック) と規定する¹¹⁾。

Halliday の機能文法における theme の規定には難解な点が多いが、談話の流れという点から、主題の多くは旧情報であり文頭に提示され、その後に叙述(新情報)が付け加えられるのが自然な順序であると考えることができる¹²⁾。主題として提示されるものの多くが自立語を中心として構成された語句であることを考えると、4.4.でとりあげた語彙的手段による結束性の項目と有機的な関係の中で考察されるべきである。

またテキスト論的レベルにおける日本語の文構造の基本は、三上(1963)にも述べられているように、助詞ハで導かれている部分(題目)とその後に続く説明との組合せでできていると考えることもできる。このことを考慮すると、助詞ハにより題述構造を把握するという方法は、テキストで展開されていく主題の流れの少なくとも枢要な部分を網羅すると考えられる。佐久間(1988)は、このような文毎の題述構造より抽出した話題の一貫性・類似性に、文段(文相互の意味的なまとまり)を重層的に設定していく根拠を求めている。この佐久間の方法は、テキストの全体的構造を求める上で決定的な役割を果たすと考えられる。なお、永野(1986a)では、主題の連続性は主語の連鎖のレベルに含まれている。

5.3. 視 点

視点表現は、テキストの送り手の視点が示されている場合と、テキスト中の素材人物の視点が示されている場合とに大きく分けて考えることができる。前者において情報の送り手（たとえば仮構されたいわゆる「話者」にしても）の存在が示されるという点では、視点表現はテキスト外のコンテキストレベルとつながりを持った表現ということができる。



叙述的な送り手視点とは、「私」などの一人称代名詞や、一人称表現とともに用いられる精神的作用を表す動詞や、心情形容詞などによる描叙段階¹³⁾の表現によって表されるものである。地の文の中で空間指示として使われる指示語（主としてコ系・ア系）も送り手の視点を中心に設定されているものである。井関（1984）のいう一人称限定視点がこれに当たるだろう。

陳述的な送り手視点とは、主として文頭・文末部の陳述における判断・表出・伝達段階¹³⁾の表現によって表されるものである。これらは、素材的・事柄的な叙述部に対する発話主体（送り手）の精神的営為が表現されている部分であり、送り手の存在が暗示されている部分である。ことさらに口頭語的表現がなされている場合もこれに準じるだろう。

共感的な送り手視点とは、ヤルに対するクレルのような、素材人物（この場合は与格目的語）に対して送り手が持っている共感 empathy の存在¹⁴⁾によって区別される表現によって表されるものである。形式的には叙述的な性格を持っているが、視点性としては暗示的なものである。久野（1978）によれば他に「貰ウ・寄コス・聞ク・行ク・来ル」などの動詞が、共感に基づく種々の視点制限をもつ動詞とされている。

素材人物視点は、基本的にはかぎ「」で囲われた素材人物の会話部（すなわちテキスト内テキスト）の送り手視点として解釈されるので、叙述的・陳述的の両方が存在することは単なる送り手視点と同様である。但し、地の文においても、素材人物を主語として精神的作用を表す動詞や心情形容詞などの叙述が用いられた場合、素材人物視点に準じる色彩を帯びた表現となる。井関（1984）の三人称限定（全知）視点はこれに相当するだろう。なお、これらの視点表現がすべて抑制された場合は、井関（1984）の三人称客観視点となると思われる。

このような視点表現は、同一・関連語句や主題と同様に、その連続性・不連続性がテキストの全体的構造の決定要因となっていくと考えられる。なお、陳述的な視点表現は、永

野(1986 a)では陳述による連鎖として扱われているものに相当するだろう。

6. 全体的構造

一つのテキストは、微視的には互いに結束性を持った二文相互の「つながり」の束から構成されている。ところがテキストが一つの完結体として理解されるためには、テキストが単なる文のつながりではなく、同一・関連語句や主題、視点などの「まとまり」を表示する項目における連続性・不連続性によってより上位の単位にまとめられ、最終的に一つの最上位の単位に統括されるという、全体構造 macrostructure の存在が必要である。この最終のレベルは、永野(1986 a)では統括論のレベルとしてとらえられている。

このような上位の単位は一般に段落といわれる。段落には形式段落と意味段落があるとされるが、文を統括するということが意味的なレベルでのまとまりを作ることになるので、本来は意味段落を想定するのが妥当である。意味段落は一般には形式段落を単位として考えられていること、実際には一つの形式段落中にもこのような文相互の意味的なまとまりが複数存在することが可能なことなどを考えると、市川(1978)・佐久間(1983・1988)のように段落の代わりに「文段」という術語を用いるなどして、形式的な段落との関係を断ち切ることも必要だろう。

文章にみられる全体構造を指すものとして、「序・破・急」とか「起・承・転・結」などが言われる。また、これ以外にも様々な文章構成法が存在するとされているが、表現の場合はともかく、テキストの理解という観点にたったときに、このような既成の構造性を念頭に置いて文章に臨むのは好ましくないと思われる。実際には多様な構造がありうるのである。より上位の単位を、佐久間(1988)のように主題の連続性としてとらえたり、あるいは同一・関連語句や視点の連続性としてとらえることも可能である。

そこでテキストの「読み(理解)」に際して、次に示すような段階を踏まえ、微視的なレベルから始めて巨視的なレベルへと帰納する方向で、客観的にテキスト性を総合的に把握することにつとめるべきであろう。

1) 文のつながりの確認

微細なレベルにおいて、文相互の結束性(指示・省略・接続詞・語彙的結束性)による連続性を基礎的作業として確認しておく。

2) 文のまとまりの発見

中間的なレベルとして、語彙的要素や話題、視点の連続性・不連続性を手がかりに、文同士の意味的なまとまりの可能性を発見していく。

3) 全体的構造の把握

1)と2)のレベルで発見された連続性をもとにして、文同士の意味的まとまりを、下位からより上位へと階層的に組み上げ、部分的構造及び全体的構造を把握する。ただし、3)の段階においては、部分的構造または全体的構造が多義的である蓋然性が予想される。このような多義性を解消するためには、作者の意図や読者論などを考慮したプラグマティックなレベルの解釈論が別に必要となってくるだろう。

注

- 1) ネウストプニー (1979) pp. 41-46.
- 2) 大野 (1988) では、コンテキスト・コード・テキストの3つのレベルを、昔話の記述の枠組みとしてそれぞれ伝承論的レベル・言語論的レベル・テキスト論的レベルと設定している (p. 64)。
- 3) Halliday & Hasan (1976) ではこれに該当する概念は texture と呼ばれ、Beaugrande & Dressler (1981) では textuality と呼ばれる。これについて池上 (1982) は、「(テキスト性は) 抽象的に捉えられる場合は textuality、具体的に現われたレベルで捉えられた場合は texture という用語が当てられたりする。」と述べている。
- 4) 訳語は池上 (1982) によった。
- 5) 林 (1983) は、発話者の交替する会話形式を想定して、文脈を自己文脈と相手文脈に分けているが、本稿の目的はテキスト分析であるので一括して文脈指示のままとした。
- 6) 久野 (1973) p. 185.
- 7) 池上 (1982) pp. 19-20.
- 8) 久野 (1978) p. 8.
- 9) 大野 (1989) において、昔話「笠地蔵」の語りの分析の中で、主要人物が「爺さま」「婆さま」「地蔵さま」のように指示語を伴わずに繰り返されることが示されている。
- 10) 池上 (1975・1980) では、特に卓立性という項目はもうけられていず、細部的(微視的)構造と全体的(巨視的)構造とが分けられているだけである。
- 11) M. A. K. Halliday の機能文法の考え方については池上 (1982 pp. 27-34)・和井田 (1987 pp. 92-93.) を参考とした。
- 12) 池上 (1982) pp. 27-28.
- 13) これらは林四郎の術語である。林 (1960・1982) は日本語の文の構造を、事実認識の描叙のレベルを中心にして、事実認識に対する判断のレベル、自己の心情を表す表出のレベル、相手への態度を表す伝達のレベルの4層に分けている。このうち伝達のレベルは受け手の存在が暗示(前提)されており、やはりコンテキストレベルを反映するものとして注目すべきである。
- 14) 久野 (1978) p. 134.

参考文献

- アンドレイ・ベケシュ 1987 『テキストとシンタクス——日本語におけるコヒージョンの実験的研究——』(くろしお出版)
- Beaugrande, R. de. & Dressler, W. 1981 *Introduction to Text Linguistics*, Longman.
[池上嘉彦他訳 1984 『テキスト言語学入門』紀伊国屋書店]
- 林 四郎 1960 『基本文型の研究』(明治図書)
- 林 四郎 1973 『文の姿勢の研究』(明治図書)
- 林 四郎 1978 『言語行動の諸相』(明治書院)
- 林 四郎 1982 「日本語の文の形と姿勢」(国立国語研究所『談話の研究と教育1』)

- 林 四郎 1983 「代名詞が指すもの、その指し方」(『浅倉日本語新講座 運用1』浅倉書店)
- 林 四郎 1987 『漢字・語彙・文章の研究へ』(明治書院)
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. 1976 *Cohesion in English*, Longman.
- Hymes, D. 1968 *The Ethnography of Speaking*, (*Readings in the Sociology of Language*, Fishman, J. A. ed., Mouton)
- Hymes, D. 1974 *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. (Tavistock Publications) [唐須教光訳 1979 『ことばの民族誌』紀伊国屋書店]
- 池上嘉彦 1975 『意味論』(大修館書店)
- 池上嘉彦 1980 「テキストの言語学とテキストの詩学」(『講座言語4 言語の芸術』大修館書店)
- 池上嘉彦 1982 「テキストとテキストの構造」(国立国語研究所『談話の研究と教育1』)
- 井関義久 1984 『国語教育の記号論 「批評の学習」による授業改革』(明治図書)
- 市川 孝 1978 『国語教育のための文章論概説』(教育出版)
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』(大修館書店)
- 久野 暉 1978 『談話の文法』(大修館書店)
- 松村 明編 1971 『日本文法大辞典』(明治書院)
- 三上 章 1963 『日本語の構文』(くろしお出版)
- 南不二男 1982 「談話の単位」(国立国語研究所『談話の研究と教育1』)
- 永野 賢 1986a 『文章論総説』(朝倉書店)
- 永野賢 編 1986b 『文章論と国語教育』(朝倉書店)
- 永野 賢・林 四郎・南 不二男・(司会) 榊島忠夫 1984 「シンポジウム記録 文章論の開拓」(『国語学』139)
- ネウストプニー J. V. 1979 「言語行動のモデル」(『講座言語3 言語と行動』)
- 大野真男 1988 「昔話を対象とした談話分析のための枠組み」(『岩手大学教育学部附属教育工学センター 教育工学研究』10)
- 大野真男 1989 「昔話『笠地蔵』の語りの分析」(文部省科学研究費補助金一般研究B 研究報告書『現代におけるイメージ形成・伝承に関する研究』)
- 佐久間まゆみ 1983 「段落とパラグラフ」(『日本語学』2-2)
- 佐久間まゆみ 1988 「文脈と段落——文段の成立をめぐる——」(『日本語学』7-2)
- 和井田紀子 1987 「M. A. K. Halliday; An Introduction to Functional Grammar」(『言語研究』91)